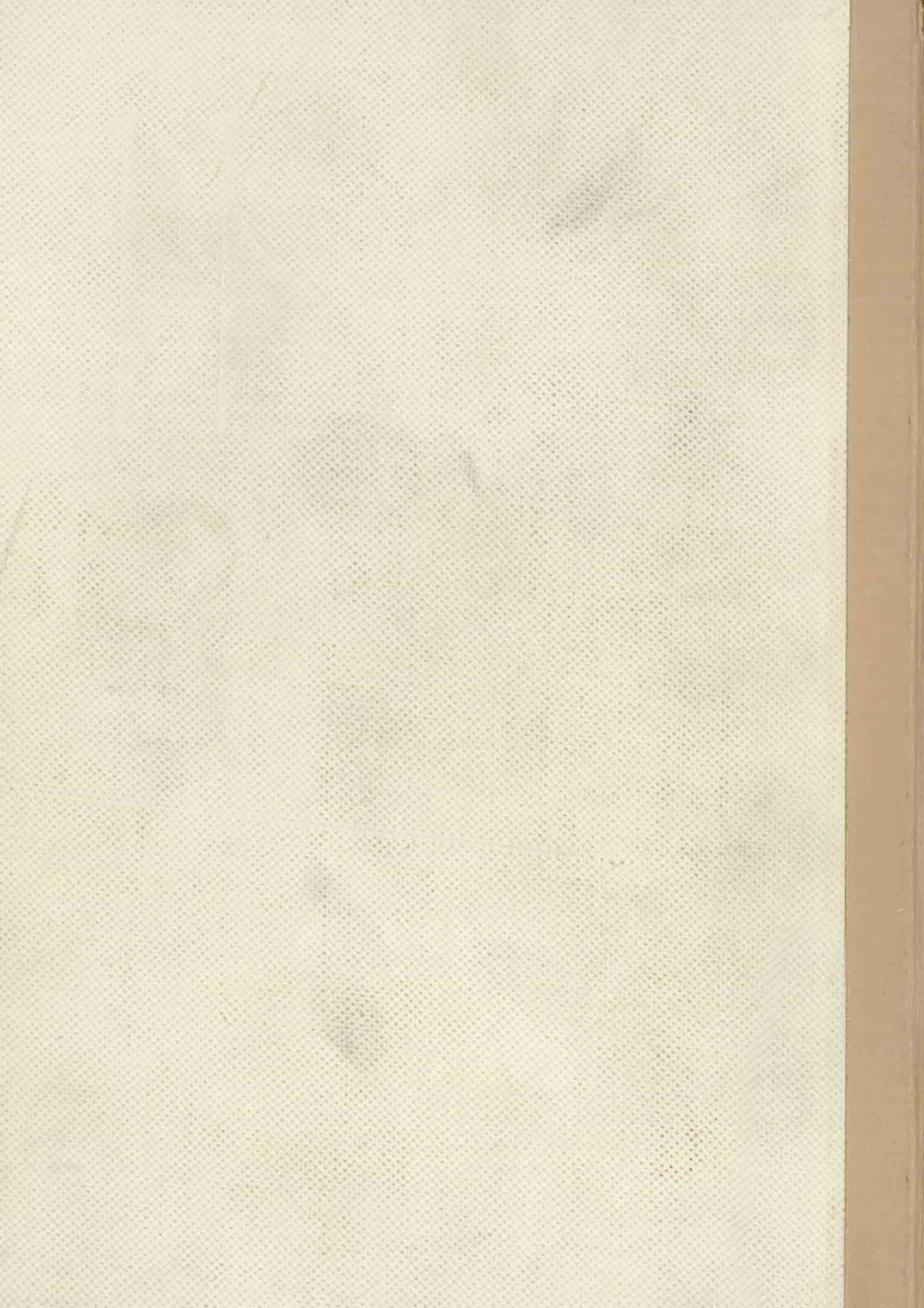
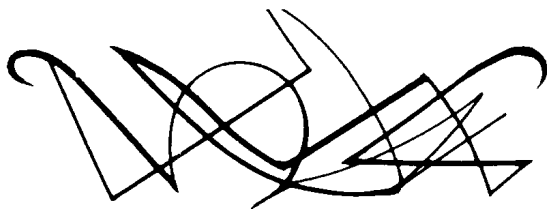






日本現代文學全集・講談社版 79

村山知義 三好十郎 集
眞船 豊 久保 榮

編	集		
伊	藤	整	
龜	井 勝 一	郎	
中	村 光	夫	
平	野	謙	
山	本 健	吉	

日本現代文學全集

79

村山知義・三好十郎 集
眞船 豊・久保 榮

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和42年5月10日 印刷

昭和42年5月19日 發行

定 價 600圓

© KÔDANSHA 1967

著 者

よし 義 郎 豊 榮
とも 知 十
やま 山 好 船 保
むら 村 三 眞 久

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京 都 文 京 區 音 羽 2-12-21
電話 東京 (942) 1111 (大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 製 大 日 本 印 刷 株 式 會 社
寫 眞 製 株式會社 興 陽 社
版 印 株式會社 大 進 堂
製 製 株式會社 岡 山 紙 器 所
製 函 株式會社 第 一 紙 藝 社
背 革 株式會社 石 井
長 紙 工 本 日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社
繪 用 紙 日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社
文 用 紙 本 州 製 紙 株 式 會 社
函 貼 用 紙 安 倍 川 工 業 株 式 會 社
見 返 し 用 紙 三 菱 製 紙 株 式 會 社
扉 用 紙 神 崎 製 紙 株 式 會 社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

村山知義集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

勇ましき主婦……………五

進水式……………一三

死んだ海

第一部 死んだ海……………二

第二部 眞夜中の港……………三

作品解説……………稻垣達郎 四五

村山知義入門……………山本二郎 五二

年 譜……………四九

参考文献……………四七五

三好十郎集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

獅子……………一〇九

炎の人……………一三

捨 吉……………一九

作品解説……………稻垣達郎 四五

三好十郎入門……………山本二郎 五二

年 譜……………四三

参考文献……………四六

眞船 豊集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

太陽の子……………三九

黄色い部屋……………三四

善光の一生……………二七五

作品解説……………稻垣達郎 四四五

眞船豊入門……………山本二郎 四三二

年 譜……………四六七

参考文献……………四七七

久保 榮集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

火山灰地

第一部……………三九

第二部……………三七六

作品解説……………稻垣達郎 四四五

久保榮入門……………山本二郎 四三二

年 譜……………四七一

参考文献……………四七六

村山知義集

勤
勞
者
の
た
め
に

勤
勞
者
の
た
め
に

勤
勞
者
の
た
め
に

勤
勞
者
の
た
め
に

一九七、四

村
山
知
義

勇ましき主婦

——一幕——

人物

ワルタ・ブレーマー。運送會社書記。(三十二歲)

エンミー・ブレーマー。その妻。(二十歲)

吉田繁。日本人。留學生。(二十五歲)

メタ・シュルツエ。勇ましき主婦。(三十五歲)

イルゼ・シュルツエ。その娘。(十二歲)

グルダ・マヨロウキッツ。猶太娘。(十六歲)

無人。ストーヴ取附職人。

所

伯林。町はづれの五階建の家の四階目のシュルツエ家の住居の廊下。

時

一九二二年のクリスマス・イヴのたそがれ時。

舞臺

上手から下手に通じる廊下。この廊下に四つのドアが開いてゐる。一つは廊下の上手を限る玄関のドア。即ちこの住居への入口。もう一つは下手を限るドア。これは間借人吉田繁の部屋の入口。あとの二つのドアは正面の壁に並んでゐる。上手のがおかみ、メタ・シュルツエ

が自分の家族、即ち自分と娘イルゼのために取つて置いてある部屋の入口。下手のは間借人運送會社書記ワルタ・ブレーマーとその妻エンミーの部屋の入口。

貧しい古い建物である。壁はいちけた模様の壁紙で貼られてゐる。

書記、玄関のドアから這入つて来る。五尺そこそこの瘦せた小男。肺病らしい。時々咳をする。猫脊。左の小脇に大きな紙包を抱へてゐる。古くなつたソフトと外套。

おかみの部屋の前をコソソリと拔足で通つて急いで自分の部屋へ這入る。が、おかみの目をのがれるわけにはゆかない。おかみは既に部屋から出て来て、書記の部屋のドアをノックする。おかみはみつしりと肥つて、麻のやうな毛を頭の上でぐるぐる束ね、眼蓋をプロプロさせてゐる。

おかみ (ジロジロ部屋の中を見廻しながら) ヘル・ブレーマー。ずいぶん早くお歸りだつたのね。その買物は何?

書記 これ? これでですか? いや何でもありませんよ。その、クリスマス・トリリーの赤ん坊ですよ。ほんのカタバカリのね。

おかみ まあ。このセチがらいのにクリスマス・トリリーだつて? 私のところなんぞはイルゼが不憫だけれど買へないんですよ。たとへ買へたつて、買はうとは思ひませんよ。クリスマス・トリリーなんかはなくつたつてすむものですからね。それにあなた方は子供ぢやないんですからね。ちよつと出してごらんなさいよ。あら、ずいぶん小さいのね。だけれどちゃんとクリスマス・トリリーの役には立つわ。エンミーさんは知つてゐるの?

書記 エンミーが? 私がトリリーを買ふことをですか?

おかみ ええ、あなたがトリリーを買ふことを。

書記 いいえ、あれは知りやしませんよ。驚かしてやらうと思つたので。

おかみ さうでせうとも。エンミーさんがそんなことに同意する筈がありませんもの。ちやまたあとで。飾付けが出来たら見せて貰

ひませうよ。

おかみは自分の部屋に歸る。書記はドアをしめる。

舞臺空虛。

玄關のドアから吉田繁が這入ってくる。書記と同じ位の小男。上等だがブクブク過ぎる外套。つばの大きすぎる帽子。醜いモンゴリアン・タイプの顔。左の小脇に紙包みを抱へてゐる。おかみの部屋の前を拔足で通つて自分の部屋に這入る。おかみが出て來て彼の部屋のドアを叩く。吉田が開ける。

おかみ（書記に對するよりは遙かに丁寧に猫撫聲で）ヘル・ヨンダ、ずあぶん早くお歸りだつたのね。（フロロロと部屋の中を見廻はして）その買物は何ですの？

吉田（ちよつとまごつくがやがて決然と）クリスマス・プレゼントです。

おかみ（歡喜して）まあ、あなたは何ていふ――

吉田（二層決然と）所が、あなたにあげるのでも、イルゼにあげるのでもありません。

おかみ 何ですつて？

吉田 僕の愛のしるしとしてゲルダに贈るんです。

おかみ 何ですつて？ あなたはまさかほんとのことを云つてるんぢやないでせうね？

吉田 うそなんか云つてどうします。ホラ、ごらんさい。トーマス・マンの小説。これはゲルダが讀みたい、讀みたいと云つてゐたもの。それからベトーヴェンの「月光曲」の譜。あなたのところにはピアノなんかありません。それからこれはチヨコレエトだが、ゲルダの弟にやるのです。

おかみ で、イルゼには？ イルゼには？

吉田 イルゼには何にもあげません。これはあなたの僕に對する仕打の罰です。あなたは毎朝イルゼを僕の部屋へ寄越す。そしてイルゼに僕の朝飯を半分食べさせるぢやありませんか。所かイルゼ

は殆んど僕よりも餘計に食べるぢやありませんか。そしてたつたこの二三ヶ月のうちにヌクヌクと背の伸びてしまつたことをごらんさい。僕の肩迄しかなかつたのが、今ぢやあしも年上の僕よりもいくらか高い位になつてしまつたぢやありませんか。恐ろしいこつた！ まるで條蟲みたいな伸び方だ！ イルゼがこんなに大きくなるだけのタネを僕はイルゼに食べさせて、その上僕は毎日二人前の朝食代をあなたに拂つてゐるんだ。が、この方はまだ我慢出来る。我慢出来ないことはゲルダに對するあなたの輕蔑だ！

おかみ（突然憤怒の形相物凄く）畜生！ ジュウめ！ 人の家の下宿人を寝取りやがつた！

吉田 何です！ そのことばは！ 畜生、ジュウめとは何です!! 僕は眞心からゲルダを愛してゐるんですよ。二度とそんな事を云つたらもうここにはあませんよ！

おかみ（今度は泣き出して）今日はクリスマスなんですよ！ ヘル・ヨンダ。あなたがゲルダを愛してゐらつしやることはよくわかりましたわ。だから私はもうそれに對しては何とも云ひませんわ。ただイルゼを可哀さうだとは思つて下さらないんですか？ イルゼは何にも知らない小娘で、あなたのことが好き思つてゐるんですよ。朝御飯のことたつて私はあなたが好意でして下さつてゐるんだとばかり思つてゐたんです。あなたがさういふおつもりなら、明日からはもう決してあんな眞似はさせませんわ。何ていふ恥しいこつてせう。戦争前には家だつて誰にでも平氣で顔を向けられるやうな生活をしてゐて、イルゼの教育費だけにでも三千マルクも銀行にあづけてあつたんですが、今ぢや三千マルクぢやパンーと片だつて買へないぢやありませんか。さあ、今日はクリスマスで、皆が樂しむための日だから、あなたのために一生懸命に盡してゐる可哀さうな母親と娘を悲しませないで下さい。ゲルダの所へは行かないで家にゐて下さいね！

吉田 二度とゲルダの悪口を云ひませんか？

おかみ さあ、もうそんなにこはい顔をしないで——

書記 (自分のドアから顔を出す) おかみさん。あの何だつたら、糸を少し——

おかみ まあ、何て人だらう。糸がたで買へると思つての？

書記 いや、何もさういふ、ただ、ちよつと—— (ひっこむ)

おかみ フン、三月も間代を拂はないくせにクリスマス・トリートなんか買ひこんで来て、その上糸をくれなんて、何て圖々しく出来た野郎なんだらう。今に見てるがいい。何ぼ初戀だからつて、エンミーさんだつて、さういつ迄もあんな男にひつついてなんかあやしないから。

吉田 何だつてあんたはさう口が悪いんだらう。

おかみ 苦勞したからですよ。さうガミガミ怒らないで下さいよ。

戦争で夫と息子を取られてしまつて、何のたくはへもなく暮してゆかなくちやならない身の上を考へて見て下さいよ。それはさうとして、もしあんたが今日一日外へ出ないつていふ約束をして下さるなら、いいお話をしあげますがね。あなたがとても聞きたがつてゐる話を。そして他の人からでは決して聞けない話を。

吉田 ——

おかみ さ、約束するでしょ。ええ、安心して約束なさいよ、損しつことはないんだから、(聲をひそめて) ゲルダの話ですよ。ゲルダはね、生れた時から家の一階下に住んでゐたんですからね、私はゲルダの事ならよく知つてゐるんですよ。所でね、話しちまひませうか、一昨年だから、さう、ゲルダが丁度十四の年にね、ゲルダの家の人達がみんなケルンへ行く必要が出来てね、ゲルダを一週間ばかり家へあづけて行つたんですよ。それで或日私はゲルダをお湯に入れてやつたんですがね、裸にして、湯槽ゆそうに入れて、洗つてやつてゐるとね、眞白で、まるで木のやうに堅い胸をしてゐてね—— (話しながら彼女は吉田を部屋の中に押し込み、自分も這入つて

ドアを閉めてしまふ。)

書記がコッソリ自分の部屋から出て来て、吉田の部屋のドアにちよつと耳をつけてみてから、拔足でおかみの部屋に忍び込み、糸を持ち出し自分の部屋に這入る。

舞臺空虚。

玄關のドアをノックする者がある。

書記が自分の部屋から顔を出す。吉田の部屋からおかみが馳け出して來たので急いで首を引つこめる。

おかみ 畜生！ 大切な時に！

彼女は玄關のドアを開ける。黒人のストーヴ取附職人が立つてゐる。

黒人 こんにちは。おかみさん。

おかみ ああ、お前さんかい。どうせこんなに遅くなつてから來るんだつたら、もうちつと別の時間にでも來る氣になればよささうなもんだつたに。

黒人 今ちや都合が悪いんですかい？

おかみ なに、來ちまつたもんなら仕方がない。で、ストーヴと煙突を持つて來てくれたのかい。

黒人 いいや、取附の場所を見に來たんですがすよ。そいでないと煙突の長さが判りませんからね。

おかみ 氣のきかない人だねえ。いい加減の長さの持つておいでよ。家ちや忙しいんだから。(聲をひそめて) 所でと、ストーヴは七萬マルクだつたね？

黒人 さうですが。

おかみ お前さん、それをね、いい人だからあの日本人に十四萬マルクだと云つてくれないかね。さうすればお前さんに二千マルクあげるがね。

黒人 どうにでも、おかみさんのいいやうに。

吉田が自分のドアから首を出す。

おかみ (黒人に) ちやなるべく早く持つて來るんだよ。(玄關のドア

を閉めて、吉田の方へ走りながら」だからね、ヘル・ヨシダ、ゲルダが疑ひもなく處女でないつてことはね——（吉田の部屋へ馳け込んでドアを閉める。）

舞臺空虚。

イルゼ、玄關のドアを開けて這入つて来る。眼の大きな、ヒョロヒョロと背の高い、と云つて發育も可成りいい、ませたブロード。みつともない毛糸の帽子と古い安物の外套。唇を寒さでブルブルふるはしてゐる。最初に自分達の部屋を開けて見て、誰もあないので、拔足で吉田の部屋を覗く。暫くしてから書記の部屋を覗く。美しい物を見た、子供らしい歡喜で身體が躍り上がりさうになる。一遍離れてまた引き返して覗く。たうとう思ひ切つて自分の部屋に戻つてドアを閉める。

吉田の部屋のドアをあけておかみが出て来る。

おかみ（部屋の中の吉田に向ひ）イルゼか歸つて來たらしいわ。ぢやよござんすか、あとで私がゲルダを呼んで來てあげるから、決してあんたからゲルダの家へ行くんぢやありませんよ。（ドアを閉めて、自分の部屋へ這入る。）

忽ち彼女の部屋の中で、彼女の叱り罵る聲とイルゼの泣き叫ぶ聲が爆發する。

おかみ（部屋の中で）何た、この阿魔！ 自分の家の中を泥棒みたいにコソコソ歩き廻りやかつて！（書記と吉田とが夫々の部屋から首を出す。）もう少し公明正大に大手を振つて歩いたらいいぢやないか！ そんな意氣地のない根性だから自分の男を猶太人なんかに取りられるんだ！

吉田は眉間に斷然たる決意を示して一遍部屋の中へ取つてかへし、すぐに先刻のゲルダへのクリスマス・プレゼントを持つて出てくる。

書記（部屋から出て來て引きとめながら）ヘル・ヨシダ。興奮しちやいけませんよ。興奮しちやいけませんよ。興奮する價值なんか絶對にないんですから。

吉田 興奮してやしませんよ。僕は決心したことを實行するだけなんです。

書記 といふのは何をなさらうと云ふんです。まさかそのプレゼントをイルゼに——

吉田 イルゼにですつて？ どう致しまして。僕はこれからゲルダの家に掛ける所なんです。

書記 プラボー、プラボー。さうこなくちやならん。私は何處までもあなたの味方をしますよ。實はあの惡魔があゝやつてイルゼを打つてゐるのも、あなたの憐憫の心を惹かうがためなのです。さあ、早くゲルダの所へいらつしやい。

吉田は急いでおかみの部屋の前を馳け抜けようとする。が、さうは行かない。おかみは疾風のやうに跳び出して來て、眼をらんらんと輝やかして彼の前に立ちふさがる。書記は自分の部屋へ逃げ込む。

おかみ（吉田を押し戻しながら）さあ、お戻んなさい！ お戻んなさい！ イルゼ！ 出ておいで！ この人をしつかりつかまへておいで。お前を蹴倒して驅け出して行く程この人か非人情な人だかどうかためして御覽！（イルゼがワアワア泣きながら出て來て、それでも一生懸命に吉田にからみつく。）私はすぐにゲルダを呼んで來るから。あの偉い美しいお嬢さんと呼んで來るから。（彼女は驅け出して行つてしまふ。）

イルゼと吉田はドアを見て立つてゐる。エンミーが玄關のドアを開けて這入つて來る。彼女は貪しいがしかし趣味の簡單な着物を着てゐる。顔は美しいといふよりは感じがいい。手に小さなパンの包みをさげてゐる。彼女は二人と顔をつき合はせて吃驚する。

エンミー まあ、驚いた。どうしたの？ まるで墮落でもしうな格好でさ。イルゼ、何を泣いてるのさ。涙をお拭きなさい。そしてヘル・ヨシダ。今日はお會ひするのこれが初めてね。では、クリスマスお目出度う。うちのワルタが歸つてゐるかどうか御存じ？

イルゼ（しゃくりあげながら）歸つてゐてよ。部屋の中でエンミーを驚かさうとして待ち構へてゐるわよ。（エンミーは一散に自分の部屋

に駆け込む。部屋の中からエンミーの叫び聲が聞える。

エンミー まあ、綺麗!! まあ、立派ー うれしいわー ワルター
可愛いワルター! あんたはまあ何て器用なんだらう! そんな
小ぢやな短い指をしてゐながら!

イルゼ (吉田に) クリスマス・トリイなのよ。さつき覗いちやつた
の。随分綺麗だつたわ。ボンボンがいっぱいぶるさがつたわ。
あとで私達に呉れるかも知れなくつてよ。お母さんがあんまりワ
ルタを叱りさへしなければ。

そこへ勢よくドアを開けて、おかみがゲルダを押しながら這入つて來
る。ゲルダは小柄な美しい娘である。着物は貧しい。髪は褐色。理智
的な眼。それは絶えず休みなしに開いたり閉ちたりぐるぐる廻つたり
してゐる。

ゲルダ 何よ。をばさん、シュルツェの叔母さん。どうしたの?

おかみ (どなる) さあ、ヘル・ヨシダ。あなたの偉い美しいお嬢
さんをつれて來ましたよ! ありつたけの事をいくらでもおつし
やい! 何故早くプレゼントを上げないの。イルゼ、おいで、こ
つちへ。お前はもう用がないんだから。

ゲルダ どうしたの? ヘル・ヨシダもそんな顔をして。イルゼ。
どうしたといふの?

一同無言。

ゲルダ 困つちやふぢやないの。私歸るわ。

おかみ (荒々しく玄關のドアの前に立ちふさがつて) いいえ歸しませ
ん。あんたとヘル・ヨシダとの間には話がある筈なんです。少く
ともヘル・ヨシダは四ヶ月間も親身も及ばない世話をしてあげた
私やイルゼよりも、たつた三四度しか遇つたことのないあんたの
方が遙かに遙かに大事なんだから。

ゲルダ だつてをばさん、そんな事云つたつて、私ちつとも知らな
いわ。

おかみ あんたが全く知らなきや成り立たないさ。だがそれともこ

れから段々成り立つのかも知れないさ。

吉田 (やつと口を開く) ゲルダさん。何とも申し譯けありません。
だが、かうなつてしまつたんだから、ちよつと僕の部屋迄來て下
さいませんか。僕があなたの家へ伺はうとするのを、おかみさん
がどうしてもきかないのであべこべにあなたをつれて來ちまつたの
です。

おかみ さあ、おいでなさいよ、ゲルダ。私の家の中なら大丈夫だ
から。

ゲルダ 何の事たかわからないけれど、それぢやちよつと。

吉田とゲルダは吉田の部屋へ這入る。

おかみ (イルゼに小聲で) イルゼ。ほんとの事をお云ひ。いいかい。

うそを云ふんぢやないよ、ヘル・ヨシダがね、お前の身體にさは
つたことはあるかい?

イルゼ 身體に? そりやあつてよ?

おかみ さうぢやないんだよ。何處か着物の下にだよ。

イルゼ (急に顔を眞紅にして) いいえそんな事!

おかみ ぢや、キスすることはあるかい?

イルゼ キスなら毎朝してよ。

おかみ フム。面白くもない。ぢや、さ、あのドアの鍵穴から中を
覗いておいで。何を云つてるかもよく聞いてゐるんだよ。變な事
を云つたりしたりしがつたら、すぐ私に云つてくるんだよ。私
はエンミーと話さなきやならないことがあるんだから。

イルゼは吉田の部屋のドアの鍵穴から中を覗く。

おかみは書記の部屋をノックする。

エンミー (中から) ちよつと待つて。

おかみ 這入らうつてんぢやありませんよ。ちよつとエンミーに話
があるから出て來て貰ひたいんですよ。

エンミー (ドアを開けながら) ちよつと這入つてクリスマス・トリ
ーを見ないこと?

おかみ（わざとトリーから眼をそらして）あとでゆつくり見せて貰ひませうよ。それよりお樂み最中で失禮だけどもちよつとお顔が拜借したいんですよ。

エンミー（出てくる）何ですの？

おかみ ちよつとこつちへ来て頂戴。（エンミーを引っぱつて自分の部屋の前迄来る）早速だけれどねえ、そしてクリスマス・イーヴにこんなことを云ひ出してお氣の毒だけどねえ。一と月分でも間代がどうにかならないこと？（エンミーが何か云はうとするのを押さへて）そりやあんたの方だつてどんなに困つてゐるかは判つてゐるけどね、去年も随分ひどかつたが今年と來た日にやクリスマス・トリーだつて目の飛び出るやうな値なんですよ。

エンミー トリーの事なんか云はなくていいと思ふわ。ワルタが一生懸命で、私に隠して貯金した金で買つて來たんぢやありませんか。可哀さうに。物價が百倍にも二百倍にも上るのに、うちののだつて私のだつて月給なんか五倍にもならないんぢやありませんか。それにくらべればあんたなんかどんなに幸福だか知れやしないわ。あの日本人からこの住居の家賃全體の三倍もする間代をしぼつてさ。

おかみ 何だつて？ 私がしぼつてゐるつて？ 私や自分の勞働の正當な報酬を貰つてゐるんですよ。どんなに私があつた日本人を家へ引きとめとかうと思つて夜晝骨を折つてゐるかあんたになんか解るもんか。私みたいなやもめで娘を抱へて、何一つ收入の道の無い者はこのタマをにがしたら早速明日つから飢ゑ死にをしなくちやならないんだからね。私やもう死に物狂ひなんだ。だのにあの猶太娘の奴が出て來てからは、いまにもあいつが家を出て行つちまひさうで仕様がないうぢやないの。私やもう明日つからはイルゼの分の朝飯を算段しなくちやならないんぢやないの。あんたもあんなだ。ほかにアテがないんならヘル・ヨシダを釣つたらいいぢやないの。肺病やみの旦那には何てつたつてストーヴは必要です

よー だらんよ、冬になつてからワルタはずつと眼に見えて弱ちやつたぢやないの。旦那が大事ならあんたの腕でストーヴの一つ位を買つてやつたらいいぢやないの。

エンミー 釣るんだつて？ ええ、そりやストーヴは是非入用だわ。ワルタは夜、寒いてつてよく泣くわ。だけど、どうするの？ それは。私には解らないわ。

おかみ 何てえぼんやりだらう。そんな大きな身體をしてさ。イルゼだつてあの猶太娘の奴が出てくる迄は結構釣つてたんですよ。

エンミー イルゼが？ まあ！

おかみ さうさ。イルゼがさ。私だつてこれでもう五年も若ければ、あんな黄色の五人や六人手もなく釣つて置くんだけど、もう駄目だ。何て口惜しいこつたらう！

エンミー だつて、私、解らないわ。

おかみ（急に涙を迸らせて、膝まづかむばかりになつて）ね、エンミー、可愛いエンミー。私と力を協たすせて頂戴よ！ あいつをこの家から逃げ出させないやうにして頂戴よ。何にも骨の折れることぢやないんだから。ね、ただ私の指圖に従つてくれさへすりやいいんだからね。（耳に口を寄せて）さうすりや私今晚からあんたの部屋を暖かくしてあげるわ！

エンミー えッ。部屋を暖かく？

おかみ さう。暖かくしてあげるわ。可愛いエンミー。そして間代も三ヶ月分だけ棒を引いてあげるわ。安心してゐていいのよ。エンミー 間代も？

イルゼがはじかれたやうにドアを離れておかみの所に走つてくる。

イルゼ（おかみに走りよりながら）お母さん！ お母さん！

ゲルダ（ドアを手荒く開けながら）いやです！ いやです！ 私いやです！（さう叫んで廊下にかたまつてゐる皆には眼もくれずに、玄関のドアを開けて出て行つてしまふ）

吉田が片手で顔を覆つたまま素早く自分の部屋のドアを閉めてしま

ふ。

おかみ (驚いて、イルゼに) おや、どうしたんだらう。早くお云ひ。どうしたんだい。

イルゼ (胸をドキドキさせながら) あのね。初め、ブレゼンドを上げたのよ。それからね、ヘル・ヨシダがね。僕は醜いから、つて云つたら、ゲルダがね。私あなたのお顔決して醜いと感じてなんかおません、つて云つたの。それから手紙の話をしたわ。

おかみ 誰のだい？ どちらのだい？

イルゼ ヘル・ヨシダがゲルダに送つた手紙よ。そして生れてからあんな熱烈な手紙を貰つたことがない、つてゲルダが云つたわ。おかみ 畜生！ 手紙のやりとりなんかしてやがつたのか。白ばつくれやがつて！

イルゼ そしたらね、ヘル・ヨシダが大きな聲で、ゲルダつて云つたの。そしたらゲルダが笑つて、でもあなたかんじんのゲルダつて名前がちやんと發音出来ないぢやないの、つて云つたわ。

おかみ フム。

イルゼ それから小さな聲で何か云つて、暫くたつたら、急にヘル・ヨシダが眞紅になつてゲルダに抱きつかうとしたの。そしたらゲルダが「いやです、いやです」つて云つて飛び出して來たのよ。

おかみ ふむ。そりやさうだらうさ。ありやまだほんのウブな生娘なんだから。(考へ深さうな眼をしたのち) さ、エンミー、可愛いエンミー、お願ひしてよあんだ。あんたは若くて、綺麗なんだもの。憎らしい程綺麗だわ。

書記 (部屋の中から) エンミー。

エンミー はい、今行つてよ。ぢや、おかみさん、ちよつと失禮。(自分の部屋に走り込む)

玄關のドアでノック。

おかみ 誰？

黒人 (外から) あつし。ストーヴを持つて來やした。

おかみ (ドアを開けてやつて) 感心、感心、今度は丁度いい時に來てくれたねえ。一つはこの部屋へ入れといとくれ。(自分の部屋を指す。黒人は運び込む) それからもう一つはね。こつちだよ。(吉田の部屋のドアをノックする。返事が無いが、開けてゾカツカ這入つて行く。ストーヴを抱いた黒人がそれに續いて這入る。イルゼは戸口からこはごは覗いてゐる。部屋の中で) ヘル・ヨシダ。ストーヴが來ましたよ。

これで暖くなりますよ。今晚からもうたけるんです。ゲルダも寒い部屋には遊びに來たがりませんよ。それにとても掘出物のストーヴで、値段と云つたらたつた十四萬マルクなんです。さうだね、ストーヴ屋さん！

黒人 さうでがす。間違ひなく。

おかみ ぢや、ここへ置いとくれ。この壁に沿はせてね。煙突は何處にあるんだい？

二人は部屋から出て來て、玄關に置いてある煙突を運び込む。

おかみ うん。これだけあれば充分だ。ぢや早速取りつけておくれ。あ、脚立がいるね。(自分の部屋から脚立を持ち出して吉田の部屋へ持ち込む)

黒人 (壁に穴をあける道具を取り出して吉田の部屋へ這入る)。旦那。ちよつとやましいが御免なせえ。

部屋の中から、鐵槌とノミで壁に穴を開ける音が聞えてくる。舞臺には、戸口に倚りかかつて部屋の中を覗き込んでゐるイルゼが見えるきりである。

書記 (あわてて自分の部屋から出て來る) をばさん、をばさん。シュルツェ夫人、どうしたんです。ひどいぢやありませんか。埃がトリの上一杯落ちて來ますよ。(自分の部屋の中を覗き込んで) ああ、穴があいちゃつた。

吉田の部屋から脚立を抱へたおかみと、黒人が出る。

黒人 こんどは何處へ開けるんですい？

おかみ（書記の部屋のドアの上の方を指さしながら）あすこ。この部屋ん中を、成るべく長く煙突を通すんだから。

黒人が脚立を立てて穴を開け初める。

おかみ（書記に向つて両手を擴げて）いかがです。運送會社書記、ヘル・ワルタ・プレーマー！

書記（自分の部屋の中を暖い煙突が通ることになったのに氣がついて、大よろこびで）いよう。有難う。親愛なメタ・シユルツェ夫人！これは、これは、どうも。（穴のうがたれるのを手をもんで、さもうれしさうに見てゐる。）

吉田が浮かぬ顔をして自分のドアの所に現はれる。

おかみ（吉田の現はれたのを見ると叫ぶ）エンミー、可愛いエンミー。出ていらつしやい。自分で一寸穴を開けてごらんさいよ。とても面白さうよ。

書記 さうだ、エンミー。ちよつとやつてごらん。面白さうだよ。

僕にはどうも、とても出来んがね。（嘆）

エンミー（出てくる）さう、やつて見ようかしら。

おかみ（脚立の上の黒人に）お降り。ちよつと奥さんがやつて見るんだから。

黒人 さうですか。あんまり面白い仕事ぢやありませんぜ。（降りる。）

エンミーは鐵槌とノミを受け取つて脚立に登る。おかみが脚立を押へる。

おかみ（叫ぶ）ヘル・ヨシダ。あんた不親切だわね。お隣りの奥さんが仕事をしてるのに脚立を押へてあげないなんて。（イルゼに眼で命令する。イルゼは吉田を引っぱってくる。吉田仕方なしで脚立を押へる。）

書記（上を向いたまま、吉田に）いや、どうも済みませんなあ。（エンミーに）おい、手を打つなよ、あんまり力を入れてさ。

皆キヤッキヤと云ひながら、エンミーが穴を開けるのを見て笑つて

ゐる。おかみはひそかに吉田の様子を見てゐる。吉田はフト上に眼をあげる。そこには眞黒な絹の靴下に包まれた美しいエンミーの脚。彼は赤くなつてマゴマゴする。しかし眼を離すことが出来ない。

おかみ（エンミーに）そおら穴が開いた。あんた大成功よ！これからは暖かくくらせるわよ。

——幕——

（大正十五年九月）

進 水 式

——二幕——

人物

カイゼル・ウキルヘルム二世。

宮廷牧師兼皇子教育係フロムメル。

侍従長オイレンブルグ伯爵。

第三皇子。アダルベルト。

劇作家。ウキルデンブルッフ。

納戸奉行。

宮内大臣。フォン・ミケル。

式部官。

北獨逸ロイド汽船會社支配人。エフ・レイス。

納戸奉行の下役。數人。

第一幕

所

柏林の宮殿の謁見室。

時

一八九八年六月の或る日の午前十一時頃の謁見時間。

舞臺

ルネッサンス式とロココ式の混和した、例の通り白と黄金色と深紅色とで彩られた大廣間。天井から飾り澤山のシャンデリヤがさがつてゐる。

上手の壁に二つ、下手の壁に一つのドアがある。上手の壁のドアの内、奥の一つは衣裳部屋へ通じてゐる。納戸奉行が常につめかけてゐて、即座の更衣に備へてゐる。下手の壁のドアはもう一つの謁見室に通じてゐる。そこでは多人數一度に参内した人達に謁見するのである。正面上手寄りに窓。下手寄りに二重のガラス扉の外にバルコン。この部屋は二階であるから、ガラスを通して緑濃い樹々の頂が見える。

卓子、椅子等適宜に置いてある。特に何のすぐれた趣味も現はれてゐない部屋である。カイゼルはロシア陸軍親衛軍野砲兵大將の通常服を着、劇作家ウキルデンブルッフとカルタをしてゐる。ウキルデンブルッフは背の高い、瘦せて、鬚鬚の黒々と生えた男である。極端に深重な態度で、常に顔をうつむけ、畏る畏る御相手をしてゐる。傍に宮廷牧師兼皇子教育係フロムメルが手につぶれたシルクハットを持つて立つてゐる。子供のやうに小さな身體の老人である。

丁度カイゼルの坐つてゐる後ろの壁にメンツェルの描いた等身の「フリードリッヒ大王像」がかかつてゐる。遠くの方でかすかに軍樂隊の行進曲。宮殿の前の街路を通り過ぎて行くらしい。

カイゼル (カルタを續けながら) ふむ、そしてお前はその椅子の上に何を見たといふのぢやね？

フロムメル 私の帽子をでございます。陛下。

カイゼル ふむ、して皇太子もまたその椅子の上にゐたといふのぢやね。

フロムメル いえ、アダルベルト親王がでございます。

カイゼル ふむ、帽子とアダルベルトとがその椅子の上にをつたといふのぢやね。

フロムメル いえ、椅子の上には私の帽子だけがあつたのでござい

ます。

カイゼル するとアダルベルトは何處にをつたといふのぢや。

フロムメル 私の帽子の上にてございます。

カイゼル ぢやお前の帽子はつぶれたらうが。

フロムメル はい、此の通りでございます。(つぶれた帽子を差し出す。)

カイゼル (初めてカルタから眼を離して帽子を見る。) うわッ、これはいい、出かしたわい、アダルベルトの小僧め。フロムメル、これは以前よりずつとお前に似合ふわい。うわッはッは。(帽子をフロムメルの頭にのせる。) こりや、アダルベルト、出て来い、偉い奴ぢや、お父さんが頭を撫でてやらう。さあ出て来い。(十二歳のアダルベルト親王よこちよと隣室から駆け出してくる。此の時ウエルデンブルッフは机を一枚まくつたが、その表を見るとあわてて元に戻さうとする。)

カイゼル (めざとくそれを見つけて) 何ぢや、ウエルデンブルッフ、出せ! まくつたものは出せ! 怪しげな眞似をするな。(アダルベルトは驚いて途中で立ち止まる。)

ウエルデンブルッフ はッ——はッ。(止むなく机を出す。)

カイゼル (激怒して) 何ぢや? ハートの一ぢや? 馬鹿奴! (カルタを床に投げつける。) ウエルデンブルッフ! 貴、貴、貴様は何たる賤しい奴ぢや! ずるにきまつた。貴様なんぞにハートの一が出る筈がないわ。畜生。つけあがるな。兵六玉め。俺が貴様をこれつばつちでも寵してをるなぞと思つたら飛んでもない間違ひだぞ。へん、貴様のやうな低脳を。誰が! 何だあのぢまは。あの「ハインリッヒ四世」といふ芝居は。馬鹿め。あんなものをよくも芝居でございなんだといつて、持つて來られたもんだ。俺の折角くれてやつた材料が滅茶苦茶ぢやないか。手前の面は全體何枚張りなんだい。呆れたもんだ。生意氣なことをしやがると向後貴様の作品には材料もやらんし手も入れてやらんぞ。(ウエルデンブ

ルッフは此の間中汗をかいて恐懼してゐる。フロムメルは吃驚してゐるアダルベルトを押してこそそと隣の部屋へさがらうとする。)

カイゼル 何處へ行く、フロムメル。(二人は立ちどまる。) 行け、アダルベルト。(アダルベルトは去る。フロムメルに向つて) 此處へ来い。嘗て文部大臣ゲッスラーに與へた等身の眞影に俺が何と書いたか知つてをるか。

フロムメル はい存じてをります。

カイゼル 云つて見よ。

フロムメル Sic volo, sic jubeo (余は斯く欲し、斯く命令す)

カイゼル よし。では司法大臣フォン・フリートベルヒに與へた眞影には何と書いてやつたか知つてをるか。

フロムメル はい存じてをります。

カイゼル 云つて見よ。

フロムメル Nemo me impune lacessit (余を害する者は必ず罰せらる)

カイゼル よし。(ウエルデンブルッフに向つて) わかつたか。わかつたら下れ。今日はもう貴様の面を見たくないわ。貴様の駄作にも氣が向いたらその中に手を入れてやらう。いいか、現代にはいい藝術は無いのぢや。何も貴様に限つたことではないわ。だと云つて貴様を駄作家でないとはいふわけには行かんぞ。藝術は傳統的、英雄的、國民的、樂天的で、時代に超越した美と典雅とを持つてをらんければならん。現代を見ろ、陋劣な墮落のみぢや。いいわ、不景氣な顔をするな。その中に手を入れてやらう。(ウエルデンブルッフは退場する。フロムメルに向つて) いいかフロムメル、この言葉をお前の頭の中に藏つてある俺の金言集の中にしつかり書き込んで置け、「藝術は王者のものなり。」いいか、ラテン語でな。(隣の部屋で鞭の音と子供の泣聲がする。) 何ぢや? あれは。

フロムメル は——は。

カイゼル 何ぢやといふに。